

令和 4 年 5 月 28 日現在

機関番号：14401

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2021

課題番号：19K13334

研究課題名（和文）中世延暦寺における論義法要の実態的研究 法華大会の正当性

研究課題名（英文）The study which elucidates the reality of Tendai Doctrinal Debates in medieval Enryaku-ji : Rightness of 'Hokke-Daie'

研究代表者

長谷川 裕峰 (Hasegawa, Yuho)

大阪大学・文学研究科・招へい研究員

研究者番号：60802361

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では、未翻刻史料群『阿弥陀房抄』にある「法身八相」「三周未来成道」という題目の翻刻作業を通して、本史料群の中に「実際に使用された豎義の論草」と「学習のための想定問答・例講問答」の二系統が併存する点を解明した。これらの題目は、『法華経』の「三周説法」「二乗作仏」という分野から豎義の問題として作成されたものであり、『阿弥陀房抄』の教学的背景、宝地房証真学派との関連性、当該期の法華大会広学豎義における具体的な試験内容を読み取ることに成功した（「証真教学の継承をめぐる一試論『阿弥陀房抄』法身八相を中心に」（伝教大師一千二百年大遠忌記念『平安・鎌倉の天台』山喜房佛書林、2021年））。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究で扱った『阿弥陀房抄』は、天台教学の最高権威者である探題が作成した試験問題・受験対策としての練習問題を収録している。そのため、比叡山における教学・修学の実態、特に学僧育成のカリキュラムに果たす論義の役割を解明するのに、大きな手掛かりとなる未翻刻史料群であることが明白となった。中世人の世界観が当該期の仏教教理に多大な影響を受けていた点や、その思想的背景に民衆社会へ積極的に進出していた延暦寺による文化的な動向が関係していた点は、既に先行研究において指摘があった。しかし、それを牽引していた天台学僧の輩出に関する具体的なメカニズムは未勘の課題であり、本研究はその嚆矢と位置付けることが可能である。

研究成果の概要（英文）：In this research project, I reprinted the areas of challenges 'Hoshinhasou' and 'Sansyu-Mirai-Jodo' of Un-reprinted "Amidabou-syou" series. As a result, it was clarified that two groups coexist in this series. That two groups are "Manuscripts of actual used exams" and "Practice questions and exemplary answers for learning". 'Hoshinhasou' and 'Sansyu-Mirai-Jodo' were created as test questions from the fields 'Three-lap preaching' and 'The two Vehicle's Attainment of Buddhahood' of "Lotus Sutra". Through those considerations, I was able to read the religious Background in "Amidabou-syou" series, the relationship with the Hotchibo Shoshin's sect and the concrete test details in 'Hokke-Daie Kogaku-Ryugi' of the relevant period.

研究分野：中世仏教史

キーワード：広学豎義 法華大会 学僧 宝地房証真

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

中世寺院史研究を飛躍的に発展させた黒田俊雄氏の提起した権門体制論・顕密体制論は、延暦寺の事例をその出発点に置く。しかし、これを継承した研究では東大寺文書・東寺百合文書・高野山文書等を中心とする検証が主流を占め、織田信長の焼き討ちに端を発する史料的制約が大きい延暦寺は研究の俎上から遠退いた。中世最大の権門でありながら史料が焼失し、日本中世史像の致命的なミッシングリンクとなっている。そこで申請者はこれを克服するために、天台教学に基づいた史料読解を中心に以下の方法を提唱した(拙稿「中世山門研究における本末関係論の意義 「宗派史観」の再評価を目指して」(『新しい歴史学のために』282、2013年)参照)。

(A) 末寺史料を活用した本寺延暦寺の政治的・経済的な実態解明

(B) 宗教儀礼関係の史料を通じた延暦寺やその本末関係の解明

上記の手法(A)では、既存の研究方法に従って寺院間の交流を考察した(拙稿「葛川明王院における行者中」(『日本仏教総合研究』8、2010年)・同「葛川明王院蔵「諸御領役御仏事用途廻文」再考」(『天台学報』52、2010年)・同「鰐淵寺における法儀の伝承と南北朝内乱 「正正式目」の評価を巡って」(『叡山学院研究紀要』33、2011年)・同「青蓮院門跡の所領経営と葛川明王院」(『史敏 村田修三先生古希記念論集』8、2011年)参照)。手法(B)は、日常的な宗教活動である法要に着目し、各寺院史料・古記録等を横断的に読む調査研究を指す(拙稿「『門葉記』に見る天台声明の伝承」(『天台学報』53、2011年)・同「山王礼拝講の成立に関する一考察」(『叡山学院研究紀要』38、2016年)参照)。

特に拙稿「出雲国鰐淵寺と青蓮院門跡の本末関係」(『仏教史学研究』53巻2号、2011年)では、末寺役の宗教的側面を解明し、従来の研究では見過ごされていた年中行事を正しい解釈へと導く道筋を示した。さらに申請者は、平成27年6月28日大阪歴史学会大会報告において手法(A)(B)を駆使した発表を行い、質疑応答を通してその有効性について高い評価を得た(拙稿「鎌倉・南北朝期の山門寺院における本末関係 法会運営と法流を中心に」(『ヒストリア』260、2017年)参照)。これに加えて研究代表者は、平成29年度科学研究費(研究活動スタート支援・研究課題「阿弥陀房抄」および延暦寺論義書の基礎研究 学僧ネットワークの系譜」・2年間・直接経費230万円・間接経費69万円)で得た研究成果(拙稿「『阿弥陀房抄』覚書」(坂本廣博博士喜寿記念論文集刊行会編『佛教の心と文化』p.729~p.758(山喜房佛書林、2019年)参照)に基づいて、さらなる実証研究を推し進めるため、本研究課題として申請したのである。

2. 研究の目的

未翻刻史料群『阿弥陀房抄』は、80冊を超える写本であり、未だ基礎研究すら出来ていない状態であった。そこで本研究では、まず翻刻作業を進め、当該期の学僧ネットワークの系譜を辿り、彼らの継承してきた論義書がどのように活用されていたのか、という点に言及することを目的とした。また、問答形式の議論を通して教義の理解を深める論義法要は、学僧を養成する場として古代・中世を通して大きく発展したにも関わらず、実態については未勘の部分が多かった。特に申請者は、『阿弥陀房抄』の考察を通して、比叡山における教学・修学の実態、特に学僧育成のカリキュラムに果たす論義の役割を解明することに重点を置くこととした。

3. 研究の方法

本研究課題では、以下の2種類の未翻刻史料群を考察対象とした。

①『阿弥陀房抄』

撰述者は宝地房証真(1136-1220)の孫弟子の宗徹。証真とは延暦寺総学頭に任命された日本天台を代表する大学匠であり、本覚思想・口伝主義を批判して文献主義を貫いた学僧として有名。その薫陶を受け継ぐ孫弟子が編んだ本史料群は、証真学派の教学を確認出来る数少ない作品。探題と受験者の質疑応答が原稿化されたものであり、同じ論題でも受験者の解答に応じて異なる質疑が展開し、数多くの論考が作成された。経典や祖師の文章の引用により論拠が的確に明示された中世における最高水準の論文集といえる。申請者は平成29・30年度科研費において実施した基礎的な文書調査の研究成果を「『阿弥陀房抄』覚書」(坂本廣博博士喜寿記念論文集刊行会編『佛教の心と文化』p.729~p.758、山喜房佛書林、2019年)にまとめた。

②『天海義科抄』(叡山文庫所蔵・天海蔵・内典・12)

天正期に南光坊天海が比叡山の宗教的な復興に備えて10ヵ所以上の学問寺院(談義所)から上進させた論義書群。これらの学問寺院では、法華大会の豎義(口頭試問)合格を目指して数多くの論義書を書写・伝承してきた。天海は焼き討ち後の復興に際して、この知的財産の蓄積を政治的意図により利用したと考えられるが、その収集の結果、中世段階における延暦寺の実態が分かるのである。本史料群は叡山文庫に90冊現存しており、この中に4冊の『阿弥陀房抄』が含まれているが、上記の①とは同一系統の写本でないことが判明した(同上拙稿)。これらの未翻刻史料群の調査・翻刻・比較検討を通して、天台学僧による教理研鑽の結果が論義法要の中に反映されている点を明らかにし、法華大会の教学的正当性を論ずるという方法論を採った。史料的制約により延暦寺は、様々な面で実態的研究の俎上から遠退いた傾向が否めないが、ここでは教学や論義書から延暦寺の内実を解明するという研究手法の確立を目指した。

4. 研究成果

本研究課題の研究成果は、以下の拙稿に成稿化した。

- ・「中世延暦寺の論義書にみる法身八相」(『天台学報』62、p.111～p.121、2020年)
 - ・「『阿弥陀房抄』法身八相(一)」(『叡山学院研究紀要』42、p.41～p.54、2020年)
 - ・「『阿弥陀房抄』法身八相(二)」(『叡山学院研究紀要』43、p.37～p.67、2021年)
 - ・「証真教学の継承をめぐる一試論 『阿弥陀房抄』法身八相を中心に」(伝教大師一千二百年大遠忌記念『平安・鎌倉の天台』p.581～p.623、山喜房佛書林、2021年)
 - ・「『阿弥陀房抄』三周末来成道(一)」(『叡山学院研究紀要』44、p.75～p.93、2022年)
- 以下、その論旨に沿って主に上記の史料④『阿弥陀房抄』に関して要約して掲載する。

(1) 『阿弥陀房抄』に内在する2系統の論稿

『阿弥陀房抄』の構成を精査すると、2系統の論稿が並存する事が判明した。証真特有の教説である「法身八相」という問題がどのように収録されているかについて、以下の表を挙げる。

【表1】西教寺文庫所蔵正教蔵本

冊	番号	義科	算題
1	93-4	教相義	横乗下種
2	90-6	十如是義	十界互具
3	93-5	十如是義	分證仏界報如是
4	90-8	二諦義	俗諦常住
5	93-3	眷属妙義	
6	93-6	十妙義	本時四教
7	89-3	三周義	
8	89-4	三周義	定性二乗成仏事 ア・エ
9	90-3	即身成仏義	
10	93-2	即身成仏義	分極即身成仏
11	93-9	即身成仏義	
12	89-1	三身義	所依文句第九
13	93-7	三身義	
14	90-1	属累義	経中経末
15	92-9	六即義	梨耶一念
16	93-1	六即義	
17	88-10	六即義	
18	92-10	六即義	元品能治
19	90-10	四種三昧義	二界増減
20	90-9	三觀義	二界増減・四種三昧義
21	82-13	三觀義	
22	81-4	被接義	一生破無明
23	90-4	仏土義	
24	90-5	仏土義	分段捨不捨・方便土説通教
25	92-6	仏性義	仏界報如是
26	90-2	九品往生義	弥陀報応

【表3】叡山文庫所蔵真如蔵本

冊	義科	算題
1	六即義	草木成仏
2	六即義	
3	三觀義	次第觀別円
4	三觀義	
5	眷属妙義	
6	三周義	ウ
7	三周義	
8	即身義	
9	三身義	爾前久遠
10	三身義	自受用相好
11	三身義	新成顕本
12	属累義	
13	仏土義	

【表2】叡山文庫所蔵円覚蔵本

冊	義科	算題
1	仏土義	自受用所居
2	三周義	決定在座
3	三身義	前後自受用
4	三觀義	三惑同時断
5	三周義	定性二乗 イ
6	仏土義	分段捨不捨 方便土通教
7	十如是義	仏界報如是 十界互具
8	六即義 四種三昧義	梨耶一念 二界増減
9	三身義 六即義	自受用相好 元品能治
10	即身義 三身義	龍女分極 自受用智
11	即身義 十妙義	海中権実 本地四教
12	三周義 仏性義	入證初住 俱知常住 無性有情
13	欠	-
14	三周義 三身義	三千塵點假実 三周末来成道 新成顕本
15	二諦義 十如是義	俗諦常住 法身八相記 オ
16	六即義 属累義	三諦勝劣 観行即退不退 四信五品退不退 属累経中経末
17	九品往生義 六即義	凡夫往生 五逆謗法 草木成仏
18	即身義末算	
19	三身義末算	
20	仏性義末算 眷属妙義抹算	

原文書は西教寺文庫正教蔵所蔵であるが、実際は国文学研究資料館蔵マイクロ資料 312号文書にて確認した

『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録(1995年)』より作成

『續天台宗全書』所収の義科『廬談』総目録を参考に配列

上記の表で色を変えた部分に「法身八相」が収録されており、【ア・イ系統】と【ウ・エ・オ系統】に分類される。前者は、証真孫弟子の宗蔵が後進育成のために作成した「想定問答・模範解

答集」であり、後者は正応元年六月会豎義に準備された「探題用の論草」である。これらの分類は、形式・内容ともに分かり易く、本史料群を分析するのに大変有効な指標となると考えられる。

(2) 正応元年六月会にみる豎義の実態

上記の【ウ・エ・オ系統】最末尾を見れば、「正応元年五月三日 定 法花立義一算 立者聖算 題者予」とあり、この史料が正応元年(1288)六月会で行われる豎義の「一ノ算」であることが分かる。題者(探題)の宗厳が、立者(豎者)の聖算に対する試験問題として一ヶ月前に作成された論草であったが、実際に使用されることは無かった。以下、延暦寺六月会・霜月会を詳細に論証した岡野浩二氏の論に依拠する部分が多い。

延暦寺六月会には建保二年(1214)より勅使が派遣されるようになり、今回の正応元年六月会で勅使を務めた右少弁勘解由小路兼仲は、『勘仲記』に詳細な記録を残している。それによれば、正応元年五月一日に僧正・権律師・威儀師・従儀師の計40名に及ぶ「延暦寺六月会聴衆法師等交名」が、朝廷へ事前提出される(六月会前奏)。そして7日間にわたる六月会の終了直後、実際の講義論議を聴聞した僧侶衆の名簿が再提出される(六月会后奏)。この両者の名簿を比べれば大幅な変更が生じており、延暦寺六月会を巡る実態の一端を示す事例として大変興味深い。また、後奏における聴衆法師の筆頭には「法印大和尚位宗厳」の名前が確認でき、探題である彼が延暦寺側の最上座として参会していた点は間違いない。しかし、六月会初日を記した『勘仲記』正応元年五月二十七日条には「座主無登山之間、堅儀無之」とあり、豎義が実施されていない。この記事について岡野氏は、「座主が拜堂を済ませていないため豎義がなかった」という建久八年(1197)の事例を併せて紹介しながら、「豎義の開催には比叡山の統括者たる天台座主の出席が不可欠であった」と結論付けている。当該史料における天台座主慈実は、同年(1288)三月二十七日に座主補任、四月十日に天皇から宣命を受けたが、登山・拜堂儀礼は八月二十八日とされており、確かにこの六月会は未だ拜堂を済ませていない時期に当たる。これらを鑑みれば、延暦寺は六月会の実施を見据えて一ヶ月前(五月一日)に朝廷へ「延暦寺六月会聴衆法師等交名」を提出し、それと同時期(五月三日)に探題である宗厳が豎義「一ノ算」の論草【ウ・エ・オ系統】を作成し終えたと考えられるのである。

(3) 「御精」にみる各流派の主張

上記のように、実際の豎義が実施されなかったために、【ウ・エ・オ系統】は探題の準備した4通り以上の「御精」が収録される希有な史料として現存することになった。この「御精」という部分は、当該期における天台教学の最高権威者である探題が口頭試問に関して見識を披露する場所とされる。つまり、その口頭試問における宝地房証真学派の正式見解と言っても過言ではない。重要なのは、この部分から、探題自身が参考にしたと思われる様々な流派の見解が読み取れる点である。例を挙げれば、安居院流・林泉坊流・仏頂坊隆真法橋(=宝地房証真の弟子)・宝地房流・大原義(第六一世天台座主顕真)などの異義が確認でき、さらに仁治三年(1242)に開催された礼拝講(日吉大社)・法華八講(延暦寺)といった過去の論議を参照している点も垣間見える。受験生の回答に応じてより実践的に見解が述べられるように、探題が準備した資料を、後日備忘録として編纂して後世へ引き継いだと推定される。証真学派の継承という観点では大変興味深い史料と考えられる。今回の正応元年六月会豎義では、受験生の意見に一定の理解を示しながらも、解釈次第では「法身記・八相記を因果に分ける論理」が成立しなくなるため、更なる正確な解釈と論理展開を求めるといふ流れになっている。受験生は改めて「分証法身」「妙覚八相」の考え方を論じて、教化される側にとっては来縁が決め手であるため自得では無いと述べ、八相記と法身記の区分は必要であると改めて反駁する。これが安居院流・林泉坊流の立場と同じ考え方であることが判明した。四重の構成が終わった後に、それまでの質疑回答の分量の三倍にも及ぶ大量の想定問答・参考文献・故事が延々と並ぶ点も注意を要する。

(4) 「法身八相」の教学的位置付け

「法身八相」という問題の教学的な背景・内容・後世への影響等を概括する。

教学的な背景

『法華経』方便品における開三顯一の解釈を十義に分けて論じた『法華文句』の第七義「得記不得記」が主題である声聞授記に関わる。そこでは、「もし皆が同様に領解したならば、どうして迹門では声聞が授記を得て、縁覚・菩薩の授記は説かれていないのか」という設問を立て、『法華経』の声聞授記について三つに分けて解説を加えた。そこでは、二乗と菩薩の差を八相成道(初住)の授記に求めており、次の議論へ進む。

問 若小悟大応同授法身記、 那得授八相記耶、 答八相是応記、 既得応記知必有本、 欲使物知聞共結来縁、 故与応記耳、

ここでは「八相成道」が「応身の授記」であると結論付けられている。この『法華文句』の傍線部が、【ウ・エ・オ系統】で質問の皮切りとなった文章である。一方、傍線部は管見の限り、『阿弥陀房抄』法身八相の端文などに使われた形跡はないが、湛然『法華文句記』では以下のように論じられている。

問の意は、どうして多劫の修行を過ぎれば妙覚位・法身を得られるという直接的な表現ではなく、初住位・八相成道と云ったのか。これこそが天台の教えであるのに、多くの人が分かってない。答の意は二つ有る。一つ目は、化他行においては八相を

示現する必要があるという点。二つ目は、歴劫の菩薩行を終えた後に法身を得るという点。後ろの論理を以て前を考え、ひとまずこの段階では法身の本を横に置いておく。故に二乗は、両処(八相と法身)の利益を得ていると云える。しばらくは八相成道の授記を与えれば、一層衆生と出会い化他行を進め、仏国土の因縁を結ぶであろう。菩薩は已に多劫において衆生を利他してきており、随って熟・脱しており、八相授記が法身の授記への始まりに過ぎなかった事(浅近の記)を知っている。二乗はそうではないので、この応身の授記を用いたのだ。

湛然は、天台の教えに基づいて「初住位 = 八相成道」と解釈すべきだが、二乗から菩薩への成長過程を鑑みて論を構築している。この湛然解釈が、後に証真『法華疏私記』や宗巖『阿弥陀房抄』において大きく取り上げられることとなるのである。

学的内容

法身が八相成道の中で示現するという立場で声聞授記を考えれば、その授記の範疇が分(分証即・初住位)から極(極果・妙覚位)までに亘ると捉えて良いのか、という問題提起が行われている。そして、範疇が両者に亘る場合・亘らない場合という二通りの解釈を加えた。両者に亘ると考えるならば、分証即の段階では「八相成道の授記」と呼び、極果を得た段階で「法身の授記」となる。両者に亘らないならば、分(分証即)と極(極果)を並列的に考えて八相成道と法身が別々に存在することになる。前者では、授記が仏の内証の一部であるため八相成道とは異なると論じ、後者では妙覚位(究竟即)の仏が八相成道を示現するとしたのである。次いで、後者の考えは湛然『法華文句記』の「極果八相」に相当するとし、諸経に見える諸仏・諸大菩薩の授記に配当させている。

これに対して、証真是「分証即は八相と名づけ、極果を法身と名づける」と主張した。彼の理論を追って行けば、声聞は初住法身の境地を悟ったとしても、未だに初住八相という形を現して化他行する段階には至っていない。そのため、これから衆生の機根に応じて八相を現し、化他していくであろうという授記(これを「八相記」と表現する)を与えた。もし、諸菩薩のように法身の本を得て自然に八相成道を示現できる段階であるならば、「八相記」ではなく「法身記」と称するべきであるとした。続いて、作仏に関して「内証の観点から云えば、既に究竟即の境涯だけではないので「究竟」では足りず、果位の観点から云えば、化導の意味合いが強い「八相成道」では適切でない」として、「修行中である菩薩の身でありながら、已に八種の相を内包しているのだから『内証の究竟即を示現する法身』と表現するのが良い」と論じた。

後世への影響

証真『法華疏私記』に端を発した「法身八相」という算題が、その他の学派に対してどのような影響を及ぼしたのかについてまとめておく。

- ・「例講問答書合」(『天台宗全書』二三(第一書房、一九七四年)二三九～二四一頁)
証真『法華疏私記』で挙げた引証を用いながら、三重の問答形式に集約・整理しており、その論理展開がより明確になっていることが窺える。ここで証真学派との相違として注目すべきは、問答が「因果関係」から始まっていない点と「燃燈仏による釈迦への授記」が引証に加えられている点である。
- ・「義科相伝抄」(同前『天台宗全書』二三、一〇五～一〇六頁)
ここには「恵光・竹林両流ともに、法身記と八相記は因果に亘らない、という立場を基本としていた」とある。加えて「八相の記は、妙覚を記すると雖も大義に非ず」という恵光院弁長の義を挙げ、『法華経』における本迹二門の立場から「初住に八相記を与え内証の記は授けず、妙覚は内証の記を与えて外用八相は授けない」と論ずる。これらは、証真学派の主張に沿っており、続く理論的な道筋もよく似ている。しかし、後半に入って「サテ(恵光院)弁長^{時ヨリ}八相^{記果位ニ通スト}云事^ハ尔前経^ノ中^ニ燃燈仏^ノ釈迦^ニ八相^ノ記^ヲ与^{ヘシ}合^レ之云也、釈迦^ノ今日成道即妙覚^ノ成道^{ナルカ}故也」と述べる。これによれば、弁長以降、法華以前に説かれる「燃燈仏による釈迦への八相授記」という教説を以て「八相記は果位へ通ずる」という解釈がなされる様になったという。
- ・『廬談』「法身八相通局事」(『続天台宗全書(論草2)義科廬談』三九～五五頁)
「宝地房ノ義勢」として「分證は八相に限る、究竟は法身に限る」を挙げ、「当代通漫ノ義勢」と評価する。証真学派の定型文ともいえる主張であるが、引証で『法華玄義釈籤』を挙げている点は特徴的である。そもそも、法身八相は『法華文句』を所依とする算題であるため、『阿弥陀房抄』においても『法華玄義』を引用することは稀であった。また、「此義阿抄^ニ夏流註^{セリ}」とも明記されており、『阿弥陀房抄』の議論を多分に踏襲している。

以上、特に拙稿「証真教学の継承をめぐる一試論『阿弥陀房抄』法身八相を中心に」(伝教大師一千二百年大遠忌記念『平安・鎌倉の天台』山喜房佛書林、2021年)の論旨に従って、本研究課題の研究成果について概略した。なお、全体の翻刻作業は現在も進行中であり、その成果は順を追って、学会誌等に掲載する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 長谷川裕峰	4. 巻 42
2. 論文標題 『阿弥陀房抄』法身八相（一）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『叡山学院研究紀要』	6. 最初と最後の頁 p.41～p.54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川裕峰	4. 巻 62
2. 論文標題 中世延暦寺の論義書にみる法身八相	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『天台学報』	6. 最初と最後の頁 p.111～p.121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川裕峰	4. 巻 43
2. 論文標題 『阿弥陀房抄』法身八相（二）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『叡山学院研究紀要』	6. 最初と最後の頁 p.37～p.67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川裕峰	4. 巻 1
2. 論文標題 証真教学の継承をめぐる一試論 『阿弥陀房抄』法身八相を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 伝教大師一千二百年大遠忌記念『平安・鎌倉の天台』	6. 最初と最後の頁 p.581～p.623
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川裕峰	4. 巻 第87巻2号
2. 論文標題 天台密教僧の修行	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大法輪	6. 最初と最後の頁 p. 120 ~ p. 125
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長谷川裕峰	4. 巻 44
2. 論文標題 『阿弥陀房抄』三周未来成道(一)』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『叡山学院研究紀要』	6. 最初と最後の頁 p. 75 ~ p. 93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 長谷川裕峰
2. 発表標題 『阿弥陀房抄』にみる「法身八相」(2) 諸本の比較検討を中心に
3. 学会等名 叡山学院比叡山文化研究所
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 長谷川裕峰
2. 発表標題 証真教学の継承 『阿弥陀房抄』法身八相の位置付け
3. 学会等名 天台学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 長谷川裕峰
2. 発表標題 中世延暦寺の義科書にみる「法身八相」
3. 学会等名 叡山学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長谷川裕峰
2. 発表標題 中世延暦寺の論義書にみる「法身八相」
3. 学会等名 天台宗教学大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長谷川裕峰
2. 発表標題 妙法院門跡編『龍華蔵北蔵聖教目録』にみる阿抄の系譜 法華大会における論草作成の手掛かりとして
3. 学会等名 叡山学院比叡山文化研究所
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 長谷川裕峰
2. 発表標題 中世延暦寺における豎義の実態 正応元年六月会の事例を中心に
3. 学会等名 叡山学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 長谷川裕峰
2. 発表標題 法身八相にみる『四十二字門』の引証 「大原義」との関係を中心に
3. 学会等名 天台学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------